



「加古川北高校に隣接する新井用水とは？」

早いもので、“ぶらり加古川”も本号で第10号を迎えることになりました。これもひとえに皆様のおかげと感謝いたします。今後とも加古川北高校同様よろしくお願いいたします。

さて、加古川北高校に隣接して流れている新井用水しんゆをご存知でしょうか。といっても、農業用水でしょうと、簡単に片付けられるものではないのです。実は加古川北高校の敷地東側は“いなみ野”台地の西端に位置しています。

学校が所在する地名の水足は窪地などを表す地理的地名の一つです。この

“いなみ野”台地の大部分は、近世になるまで荒野のままに放置されていました。しかし、戦国時代から発達してきた築城や鉱山採掘などの技術が、用水路の開削やため池の築造にも活かされるようになりました。江戸時代の新田開発では、“いなみ野”台地周辺の河川（加古川や明石川）や台地上の中



小河川（草谷川や曇川）を水源とする新井用水が1655年（明暦元）に整備されました。用水はいずれも取水期間が制限されていたので、取水した水を貯えておくためにため池が数多く造られました。このことは、ぶらり加古川第2号で詳しく取り上げています。このような本格的な水利開発が進んだ理由として、①戦国時代における土木技術の発展により、河川の上流部で分水し、水利に乏しかった台地に導水したことで、その地域の新田開発が進んだこと。②地区間の利害対立が激しかったが、武家支配による強大な権力を背景にして水利調整が実施できるようになったこと。③室町末期ごろからの郷村制や農村自治の発達にともなって農民上層を中心とした地域的な統合や水利支配が次第に進んだこと。などがあげられます。

すぐそばに先人の残したすばらしい遺産が横たわっていることを感じてほしいと思います。

ぶらり加古川 第10号

平成27年9月